

## 圖版要項

### 一三二五 片輪車螺鈿時繪手宮 東京 小倉彰氏藏

|        |               |
|--------|---------------|
| 總高     | 一三・五厘(四寸四分五厘) |
| 蓋 堅    | 二二・四厘(七寸三分五厘) |
| 木製螺鈿時繪 | 橫 三〇・六厘(一尺一分) |
| 身 堅    | 二一・〇厘(六寸九分)   |
| 橫      | 二九・二厘(九寸六分五厘) |

圖示の手宮は長方形の比較的浅い被蓋造の宮で、寫眞にも明かなる如く、角は丸味を帶び、蓋には塵居よりなだらかに立上る甲盛があり、四方には微かながらも胴張が見られる。現存する平安末より鎌倉時代の手宮・櫛笥の類に就いて見ると、殆ど例外なく何れも印籠蓋造であつて、この手宮の如き被蓋造のものは只僅に近年吉野富雄氏に依り始めて世に紹介された河内金剛寺所藏の野邊雀蒔繪手宮(同氏の命名に従ふ)に類例を見出すのみである。手宮の古制に就いては未解決の問題が尠くないが、現存する文獻中、平安時代の調度に就きその古制を傳へ且つ最も詳細なる記述の見られる類從雜要抄に據ると、手宮は印籠蓋造で懸子三個を備へ、身の長さ一尺二寸二分乃至一尺三寸五分、弘さ八寸、高さ六寸乃至六寸四分半、蓋の高さ一寸(以上何れも内法)が定寸法とされてゐる。金剛寺の手宮の寸法は上述のものに稍、近いが未だ親しく調査する機會を得ないので暫く措き、小倉家の手宮にのみに就いて言へば、大體手宮としては小形であり特にその高さが著しく低く且つ懸子を備へてゐないこと、しかも懸子は嘗てあつたものが失はれたのではなく本來附屬してゐなかつたものと推測される點から、この宮が果して手宮と稱すべき形式のものかどうか多少の疑なきをえない。假に本來手宮として作られたものとすれば、寧ろ異例の形式に屬するものと考へられる。置口には角縁の錫が用ひられ、身の兩側面には紐の

銀座として銀製車輪形の金具が附けられてゐる。塗は内外とも黒塗である。

外面は蓋・身とも濃密な金の塵地とし、その全面に暢達な流水文様を研出蒔繪で表し、その間に半ば水中に没せる車輪を二個乃至五個組合せたものを點在せしめたもので、一般に片輪車と稱される文様である。片輪車の總數は六十五中二十九は蒔繪とし他は螺鈿で表はされてゐる。蒔繪の片輪車は流水と同様研

#### 御物 片輪車螺鈿時繪手宮

出蒔繪ではあるが、流水には焼金のみが使用されてゐるのに反し、片輪車には色調を異にする焼金と青金より成る二種の鑑粉を夫々巧みに使ひ分けて配色に微妙な變化を示してゐる。斯かる手法は後述する金銀蒔暈しの手法と相俟つて平安後期の蒔繪通有の著しい特色をなすものであり注目に値する。螺鈿の部分は青貝を所要の形に切透し且つ毛彫を加へて素地に象嵌し、更に塗漆の上表面を平滑に研磨したものと考へられる。螺鈿の片輪車の中には少數ではあるが波文の毛彫を施されたものがあり、それらは恐らく、表面を軽く流れに洗はれてゐる片輪車を表さんとしたものであらう。螺鈿を蒔繪に併用したことは平安後期の吾が漆工の大いに誇るに足る創案といふべく、當時の遺品としては金剛峯寺藏澤千鳥螺鈿蒔繪小唐櫃、法隆寺獻納御物・鳳凰紋螺鈿唐櫃及び中尊寺金色堂に顯著な諸例を求めうるが、何れも蒔繪技法としては研出蒔繪に限られ、螺鈿には繊細な毛彫はあるがその表面にまで蒔繪の施されてゐるものは全然なく、螺鈿をも蒔繪の部分と同様に平滑に研磨してその素地を全面的に生かしてゐるのは注目すべき點である。螺鈿の部分にも蒔繪を施すやうになるのは、言ふまでもなく、金銀粉の製造が進歩して平蒔繪の手法が行はれるに至つてからである。その明確な年代に就いて

は知る由もないが、遺品の上では鎌倉初期の作例とされてゐるもの、例へば鎌倉八幡宮藏籬菊螺鈿蒔繪硯箱、原家藏浮線綾螺鈿蒔繪手宮、松平伯藏牡丹蝶螺鈿蒔繪手宮及び同家藏片輪車螺鈿蒔繪手宮等に夙くもその實例が認められる。

これらの諸例に比較する時、單に技法の點のみより論じても、小倉家藏手宮は著しく古様を存するものである。片輪車なる文様に就いては茲に細説する餘裕はないが、平安時代の作例としては四天王寺藏扇面法華經や嚴島神社藏平家納經等の下繪及び大長壽院藏最勝王經十界寶塔曼荼羅等に散見するに於いても、當時流行した國風文様の一であることが知られる。次の鎌倉時代に於いては鏡背の文様等にも屢々表はされる程盛に流行し、遂に永く現在にまで傳へられてゐるのは周知の通りである。

内面は絢爛たる外面とは全く趣を異にし、蓋・身とも見込の部分のみならず四方側面にも梅・松・櫻・柳・橘或は菊・龍膽・紅葉・薄・桔梗・女郎花等の春秋草花とりくゝの折枝に小禽・蝶を配したものを散文様とし、之を淡い塵地に金銀蒔暈しの研出したもので、その清楚可憐な風情には無限の清韻が湛へられてゐる。殊にこの折枝文様には平家納經や西本願寺藏卅六人家集の料紙下繪又は藤原鏡に見られるものと多分の共通性が認められ、そのことはこの手宮に於ける蒔繪及び螺鈿の技法上の特色と相俟つて、その製作年代が平安後期を降らざるものとする有力なる證佐を與へるものと考へられる。

この手宮の底裏には「手箱一合 奉施 法隆寺 神龜子八月日 □比丘尼」

八カ

なる針刻の銘が四行に認められてゐる。法隆寺にはこの手宮に形狀文様及び技法の酷似したものが古來源賴朝奉納として傳へられ、現にその手宮は同寺より他の諸什寶と共に御府に獻納せられて居るが、小倉家藏に比して製作時代は遙に降り江戸初期頃のものと思われる。一方小倉家藏の手宮はその銘文にもある如く、元來法隆寺の什寶であつたが江戸初期に灘波の富豪淀屋辰五郎の有に歸し、その後元祿年間に淀屋が没落し闕所となつた際當時の大坂城代であり前所藏者たる松平子爵家の祖・上田城主松平侯の所有に移つたもので、賴朝奉納の

寺傳は本來小倉家藏の手宮に關するものとする説がある。何れにせよ、この間の事情は甚だ錯綜して居り又明確な史徴を缺くので今濫に論斷を下し得ないが、上述の「神龜」の紀年ある銘文は後人附加のものであることは言ふまでもなく明かで、それが又この手宮の傳來に絡る極めて不可解な作爲と何等かの關聯を有することも容易に想像されるであらう。

### 三三 傳夏圭筆竹林梅花圖 東京 侯爵 淺野長武氏藏

紙本墨畫 挂幅裝 横 八七・九寸(二尺九寸)

三四・八寸(二尺一寸五分)

以上參照 田中倉琅子「淺野家の竹林梅花圖に就て」

### 四六 天神緣起繪卷殘闕 東京 帝室博物館藏

紙本著色 挂幅裝 横 四〇・〇寸(二尺三寸二分)

五五・三寸(二尺八寸二分)

天神緣起繪卷の殘闕である。菅公薨後間もなく菅公の靈が叡山の尊意僧正のもとに化現せるを圖した段で、持佛堂に於て對談するうち菅靈の吐いた栢榴が火となつて妻戸に燃え移るのを尊意が灑水の印を結んで消すところである。向つて左端の詞書はこれに續くべき次段の清涼殿落雷に關するものである。繪と詞とは一紙を共有し、兩者の間は墨線を引いて畫してゐる。

この殘闕は天地に多少の切詰めがあると思はれるが、現狀に於て猶堅四十糎を計り得、通常の鎌倉繪卷に比し約五六糎方大きい。この連れと覺しい殘闕或は繪卷の他に傳存するものあるを聞かない。

この繪様は、しかし乍ら、諸々の天神緣起中、津田天満神社所藏の三卷本のそれに近似する。即ち對座する菅靈と僧正との位置の關係並びに姿態衣文等に至るまでの相似は兩者の他に隔絶した近親關係を示すものである。而して、その委細は省略するが、詞書の比較も亦それを裏切らない。本誌第二百二十六號圖版校刊若し之等の點よりの類推が許されるならば、本殘闕はその向つて右側に連地を隔てた僧正の房を今しも菅靈が訪れて妻戸を叩いてゐる繪様が連つてゐた